

南フランス出張報告

平藤喜久子

2013年3月1日から31日までの1ヶ月間、南フランスのトゥールーズ・ル・ミライユ大学（Université de Toulouse 2 le Mirail）に招聘教授として滞在をした。ここでは出張報告として大学での講義や滞在中に訪れた宗教施設等を紹介する。



トゥールーズ・ル・ミライユ大学校舎
ここで日本語の講義などが行なわれている

トゥールーズは、フランスの南西部、ミディ＝ピレネーの中心都市である。エアバス社の本社もある工業都市で、近隣のスペインからの移住者も多く、国際色の豊かな街である。そのトゥールーズにあるトゥールーズ・ル・ミライユ大学（日本ではトゥールーズ大学と呼ばれることが多い）は、7万人以上の学生を有するフランスでも屈指の規模を誇る大学である。

このトゥールーズ大学の日本学（section japonais）に、かつて Encyclopedia of Shinto のイントロダクションのフランス語訳をして下さった Yves Cadot 氏が教員として勤めておられる。その Cadot 氏から、近

年フランスでは日本のポップカルチャーについて関心を持つ学生が多く、神話や神道への関心も高いため、関連する講義をして欲しいとの依頼があり、今回の招聘となった。滞在中は、次の授業を行なった。

「神道入門」（対象：2年生）

「日本人の結婚式」（対象：2年生）

「学生の宗教意識」（対象：4年生、大学院生）

「占いと日本人」（対象：4年生、大学院生）

「神、神道とポップカルチャー」（対象：全学年）

なお、滞在中、以前に日本文化研究所で共同研究員をして下さっていた Arnaud Brotons 氏の招きにより、エクス＝アン＝プロヴァンスにある Aix-Marseille 大学でも、「神話とポップカルチャー」と題する講義を行なった。

大学での講義は2時間だが、そこには質疑応答の時間も含まれている。この質疑がかなり活発で、依頼にあったように、たしかにフランスでは日本文化への関心が高いということを実感した。

たとえば「神道入門」という神道の基本的な考え方や神社、参拝方法を学ぶ授業では、なぜ手のほかに「口」を清めることが求められているのか。「口」が象徴しているのはなにか。狛犬は獅子なのか、犬なのか（英語では Korean Lion と訳されることが多い）。といった事柄から、神職や巫女になるための条件、就職状況などについて詳しく知りたいと

いう質問もあった。

「日本人の結婚式」については、クリスチャンは少ないのにキリスト教式がもっとも多いという点には関心を抱いたようだが、それよりも、日本人と結婚したときに生じる義務や、その間に生まれた子どもの教育、さらには離婚後の国籍のことなど、結婚式というよりも「日本人との結婚」に関心が高いようであった。ポップカルチャーについては、日本神話に関連するゲーム「大神」の人気の高いことがあらためてわかった。また、妖怪に



関する作品も多く知られており、日本人の神と妖怪についての意識の違いなどに質問が寄せられた。「神道入門」の授業では、希望者に巫女の装束を着てもらおう試みをしたが、予想以上に希望者が多く、とても好評だった。

海外の大学で一回だけではなく、複数回の講義を担当するのは、初めての経験であった。質問というよりも、議論をしたがる学生との授業は、意外な発想に驚いたり、うろたえたりしながら、とても楽しいものであった。

滞在中はトゥールーズの街中はもちろんのこと、近隣の宗教施設についてもできる限り訪問をした。いくつか訪問先を紹介したい。

ピレネーの麓であるトゥールーズは、世界遺産サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路上に位置する。サン＝セルナン大聖堂がその教会で、フランス南部のロマネスク様式を代表する建築となっている。トゥールーズは建築物の多くがオレンジがかった赤茶色をしていることから「バラ色の街」と呼ばれるが、この大聖堂もまさにバラ色をしている。



トゥールーズ、サン＝セルナン大聖堂

奇跡を起こすという「ルルドの泉」で知られるルルドは、トゥールーズから電車で3時間ほどにある。1858年にベルナデットという少女が川の近くの洞窟で薪を拾っていたときに聖母マリアが出現し、そこに水が湧いた。その水を飲んだ人々の病が癒えたと伝えられ、それが奇跡として知られるようになり、カトリックの聖地となった。現在ではその洞窟の上に巨大な聖堂が建てられ、水を飲み、水を浴びるために世界中から人々が訪れている。訪れたときは3月の上旬で、巡礼のハイシーズンではなく、わき水もまだ冷たかったが、水浴の時間には人々の行列ができていた。



教会の右下がマリアが出現しとされるマッサビエルの洞窟

トゥールーズを中心とするフランス南部は、11世紀から13世紀にかけてカタリ派（アルビジョワ派）の信仰が盛んだった。民衆運動であったカタリ派は、禁欲を重視し、カトリックの聖職者の優雅な暮らしを墮落と責めたこともあり、異端と認定され、ローマ教皇によって組織されたアルビジョワ十字軍に攻められた。カタリ派は砦に籠もって戦い、最後に立てこもったモンセギュールが陥落すると、改宗を拒んだ多くの者たちが火刑に処せられたという。今回は、このカタリ派ゆかりの地をいくつかまわることができた。

アルビジョワ派の名前の由来となっているアルビは、十字軍の後、司教が支配する「司教都市」となり、カトリックの偉容を示すような大聖堂が建てられた。2世紀かけて建造された中世ゴシック様式の大聖堂のなかには、見事な最後の審判の壁画がある。



右手奥がアルビの大聖堂



ローマ時代からの城塞都市であるカルカソンヌは、トランカヴェル家の支配下にあった11世紀にカタリ派が根付いた地である。しかしアルビジョワ十字軍によって攻められ、降伏すると、フランス王領となった。現在は「歴史的城塞都市カルカソンヌ」として世界遺産にも登録され、フランスを代表する観光地となっている。悲惨な記憶であるカタリ派は、観光資源となり、土産物屋にはカタリ派関連の本などが多く積まれていた。



カタリ派が立てこもった砦がある地域は Pays cathare（カタリ派の里）と称され、廃墟となった城砦がいまも残っている。ケリビュス、パイルベルテューズ、モンセギュールと3カ所の城砦跡を訪れたが、いずれも切り立った崖のようなところにあり、岩に手をかけながらよじ登るようなところもあった。その内部に100人を超える人々が籠城をしたことも信じがたいが、またそれを下から攻めたという事実もまた信じがたいほどであった。異端とされながら、火刑を畏れずに信じ抜いた人々の強さを感じるとともに、それを許さない「正統」を自認する人々の執拗さについても思いを巡らせる機会となった。



山頂にあるのがモンセギュールの砦



モンセギュール砦の北側。この側から十字軍はよじ登って攻めた。

法王庁が一時おかれたアヴィニョンやサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路「ル・ピュイ」の道のモワサックの修道院付属教会など、ほかにもいくつか興味深い宗教施設を訪れることができた。その写真や動画については今後宗教文化教育の教材として、一部は「世界遺産の宗教文化」のサイトなどで公開していきたい。

このような宗教施設を見学するだけでなく、滞在中には、ローマ教皇の選出選挙であるコンクラーベが行なわれていたが、決まるまでずっと中継を続けるテレビ番組を見て、さらに決定後に教会のミサに参加したりすることをおし、あらためてフランスにおけるカトリック文化の影響の強さを感じた。

大学での講義だけではなく、このように限られた紙面では書き尽くせないほどの得がたい体験をすることができた。この機会を与えて下さった Cadot 先生と一ヶ月の不在をお許しいただいた日本文化研究所のスタッフの方々にも心より御礼申し上げたい。